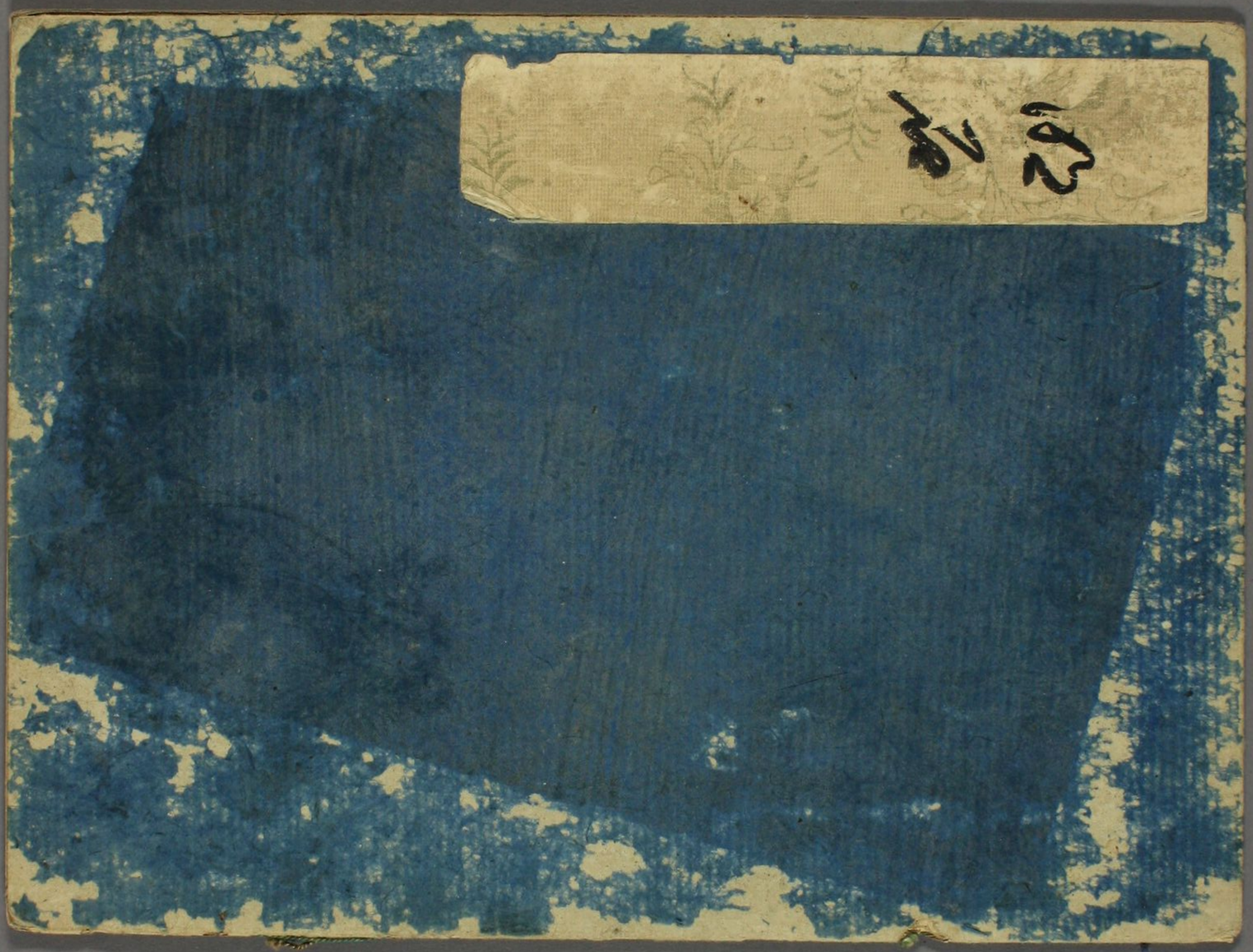

わたり

昭石

是ハ都方ヨリ出ル新備ノ品、
我いまゝ西国を見る紅葉
にかりの立ち寄りしに
ちるもみぢ秋とは見ぬ来てみ
ぬ人にもめくまるる小車法師山滑
とうらのぐ切ごつ乃池水生田川

なり

切や 猿蓑

九曜文庫

[illegible]月や須磨の浦のしお
[illegible]
[illegible]

明石の海とうやはぶつくる屋
[illegible]
[illegible]

[illegible]
うらの夕[illegible]
[illegible]
いるる[illegible]

寅やりの[illegible]

[illegible]
秋法日の打つる風色深き海つ
らみぶすとくるる浪の[illegible]
[illegible]
海[illegible]人もあるさきの[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
心うきる月日も何[illegible]
[illegible]
すさ[illegible]

月をのみうらの浪ぢ
風もおだやかなる朝ぎりのおぼつかなき
山の木ずえ花ぬしをとはんと
源氏の君の
しらぎくのあさぎりの
ちさとりの
歌女性と尋ねたる事の
いかに見る
はかなくはかの事あるくはかの事あるくは
そ
はかなくはかの事へはかなくはかの事へ
源氏の大将と信濃とと
はかなくはかの事へはかなくはかの事へ
見いだしたる
よりぬるとりあつかるものなる源氏
大将その時は橋ぬしの法師
ちさとりんしあだかりうつ永雨

此世ならんと信じ行ひ西方の
風形あらんべき道のむとそんとも
さのこと信ひさうとぞもとと行
ひつと契り信しまやうこの
くに秋あるもの人の者宣離乃ふ
元法并に都へ向り信り教授れ
是女もいとと乃名ゆとおしこむし

かしこく西方乃家あく年月をれ
くと信ゆとこと乃ふくは　只　うやう
ふくしくかくり信ぶ者いるる
ふくへ行ん　　して
　　言いうとこと乃意
祖もかくこの乃松法の苦乃下我迄
ともくもそもも信へ　　日下　　教うめると
夕乃乃義と清あしあさ法と明

石の色に女ともじゃ法師され
りへやいさいうるうるもりつる吹雲
法おうるれうるりこの松りけうく
きうり　待俺ふ紅しと形
さ東色正そうじゝ苦りし
法い色やうるあ嵐と消あ嵐
とどしふ法師さうとふ松ひ

ふ法師さうとふ松　なて雪　明め夜
あやうくさうへるいいさきあ
ぬんどうるうるん　ちる夏　うやう
にうるるふ心乃やうれた
きやうと法乃御こ色とそうるとあ
くうきるるうるれ生るれるり
りうるうるの御幸やりうあと

[illegible]

[illegible]

[illegible]

元りる源氏の君とかきつらねの
桐壺の帝の御子四人まします
御母皇后宮ゆゑ花の宴
月の秋とくさぐさへそやむしき
されとも
りとよ
つくくとうるさきことのみ

書写をもきこえ
そそ
須磨の浦に
あ心とよとたれうつと
て
須磨
す
やはりこの須磨のうらめ
しそうの
御直衣
いとゝ

[illegible]
[illegible]
小沢船さめさしたるもいつ
[illegible]
[illegible]
[illegible]

一云の葉の　月　これもこむ
さむしりもいまも花の物語
最乃新し松吹ことも世をうしのこ
よのもくへあり　上　下てこ　いつまし
らをのおとの　月　ありけし
をのことのいとあうきやと
やうもこさくじいい清水の清
けさはと来風の立へる毒
物とそもとあ絶へや辺も絶へ
是もくありとり新乃えまぶ
もくありとりタあ変ともだん
つ秋美い芦にいらり